

# Building Awareness of Sustainability through ESD: NCUアジア拠点校シンポジウム2019に参加して

名古屋市立大学大学院人間文化研究所 曾我 幸代



写真1 セヴァン・カリス・スズキ  
(出典: Earth Charter website より)

本学が国際交流をしているアジア拠点校のシンポジウム「アジアにおける社会衛生環境・生物多様性保全のSDGsと都市問題 (Think about SDGs on Public Health and Bio-Diversity at Urban Environment in Asia)」が一月四日から六日まで開催された。五日(木)の午後で開催された「社会環境」のセッションで発表する機会を頂戴した。「ESDを通して持続可能性に関する気づきをもたらすこと」と題して、筆者が人文社会科学部のESDプログラムで行っている実践を報告した。ここに、その内容を記しておきたい。

はじめに、みなさんに聞きたい、「子どものころの夢は何だったのか?」と。医者、看護師、スーパーヒーロー、パン屋さん、弁護士、宇宙飛行士、お花屋さん、コックさん、教師、スポーツ選手……、

〇〇になりたい、という夢を誰もが持っていたのではないだろうか? 筆者自身も、子どものころ、さまざまな夢を抱いていた。

ここに一枚の写真がある。この人が誰だかわかるだろうか?

彼女の名前はセヴァン・カリス・スズキである。約三〇年前、当時一二歳の彼女は、一九九二年ブラジルのリオ・デ・ジャネイロで開催された地球サミット(国連環境開発会議)で各国の要人らを前にスピーチをした。そのスピーチの冒頭で、彼女はある夢を語った。

私の世代には、夢がありません。いつか野生の動物たちの群れや、たくさんの鳥や蝶が舞うジャングルを見ることです。でも、私の子どもたちの世代は、もうそんな夢をもつこともできなくなるのではないかと? あなたたちは、私ぐらの歳のときに、そんなことを心配したことがありますか。

こんな大変なことが、ものすごい勢いで起こっているのに、私たち人間ときたら、まるでまだ余裕があるようなのきな顔をしています。まだ子どもの中には、この危機を救うのになにをしたらいいのかわかりません。でも、あなたたち大人にも知ってほしいんです。あなたたちもよい解決法なんてもっていないっていうことを。

(セヴァン・カリス・スズキ  
二〇〇三)

同じスピーチの最後に、彼女は次のように述べた。

学校で、いや、幼稚園でさえ、あなたたち大人は私たち子どもに、世のなかでどうふるまうかを教えてくれます。たとえば、

- ・ 争いをしないこと
  - ・ 話しあいでも解決すること
  - ・ 他者を尊重すること
  - ・ ちらかしたら自分でかたづけること
  - ・ ほかの生き物をむやみに傷つけないこと
  - ・ わかちあうこと
  - ・ そして欲ばらないこと
- ならばなぜ、あなたたちは、私たちにするなということをしてるんですか。

(セヴァン・カリス・スズキ  
二〇〇三)

いかがだろうか? この言葉に何を感じるだろう。実際、このスピーチから三〇年後の社会はどうなっているだろうか? 私たちが捨てるごみで河川や海、土地は汚れている、自然災害による被害は年々悪化している、経済格差によって生きづらさを感じている人は世界中

にいる、多くの地域で紛争が起きている、など、セヴァンの呼びかけに反して、私たちは持続可能な状況—人権侵害、ジェンダーの不平等、差別・偏見、異文化・異宗教への不寛容、HIV/AIDS、疾病、虐待、気候変動、自然災害、獣害、生物多様性の損失、農村の変容、過疎化、ライフスタイルの変化、都市化、難民、経済格差、貧困、飢餓—に直面している。セヴァンのスピーチから約三〇年経った今なお、グレタ・トゥーンベリをはじめとする若者らがセヴァンと同じように世界に向けて、気候変動の警鐘を鳴らしている。「なんつことを…! (How dare you!)」という強烈

な一言は、今も筆者の頭に残っており、何かを変えなければいけないと思いはじめた。

一方で、世界が何もしていないわけではないことは、みなさんもお分かりだろう。二〇一五年の国連でSDGs (Sustainable Development Goals: 持続可能な開発目標) を含めた「我々の世界を変革する…持続可能な開発のための二〇三〇アジェンダ」が採択された。国連加盟国に持続可能な社会形成に向けて、行動に移すことを呼びかけ、二〇三〇年まで

に目標を達成することが目指されたのである。

## SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS



図1 SDGs  
出典:国際連合広報局

筆者の専門はESD (Education for Sustainable Development: 持続可能な開発のための教育) である。図1にあるSDGsゴール

4に関わり、国連においても二〇〇五年から一〇年間その普及と促進のためのキャンペーン期間が設けられた。ESDは、持続可能な状況を扱うことを特徴としている。それに対してオルタナティブな方法で状況改善すること、また現在の状況に関係している私

たち一人ひとりの価値観や暮らし方を問い直すこと、私たち自身および社会が変わることを目的にしている教育活動であり、また考え

方であると言える。筆者の研究は、ESD論を捉えること、何がESDであるのか、どのような方法をとるのがよいのかについて考えさせる機会をつくること、ESDの実践と理論をつなげること、大学でのESDプログラムを開発すること、教員研修を通して持続可能な未来に向けた教育文化をつむぎ直すことにある。その中で、大学でのプログラム開発について報告する。

プログラム開発の際に、一つの考え方として活用したのが、一九九六年にユネスコに提出された「二十一世紀教育国際委員会」報告書「学習…秘められた宝 (Learning: Treasure Within)」に書かれた「学習の四本柱」— 知るための学び (Learning to know)、為すための学び (Learning to do)、共に生きるための学び (Learning to live together)、人間存在を深めるための学び (Learning to be) — である。「知るための学び」は、いわゆる、授業等での学びそのものである。何を学んだのかに関わる。

「為すための学び」は学びを行動に移す方法である。いかに実現するのかに関連する。「共に生きるための学び」は、他者との協働や技法、態度を含む。最後の「人間存在を深めるための学び」は、その人自身の価値観やあり方に関わり、自らの存在を問うような深い内省が求められる。

人文社会学部においてESDを通して、学生らが自らの学びを暮らしや生き方につなげることをねらいにした授業は、三つからなる。一年次用にESD入門およびESD基礎科目があり、二年次用にESD概論があり、三年次用にESD演習 (スタディツアー) が用意されている。ESD入門では身近な状況から問題点を見出し、それに対応する策を考え、提案すること、ESD科目ではさまざま問題を知ること、ESD概論では状況の問題点をSDGsの視点から捉え、学生自身が持続可能な対応策を考え、それを実践すること、ESD演習では、実際に海外諸国に向き、開発について他国の若者と意見交換しながら、自らのありようをふり返ることに目的を置いている。ESD基礎科目には、学部教員が全員関わっていることも本プロ

グラムの特徴としてあげられるだろう。一科目に三学科—心理教育、現代社会、国際文化—の教員が関わり、それぞれの科目でテーマにしている状況について、それぞれの教員からのアプローチや指摘を学び、多角的なものの方を見方を身につけられるようにしている。それは、SDGs自体に、また持続可能な開発に、それぞれ個別に対応するのではなく、環境保全や経済発展、社会的公正の調和を図りながら、また一七目標それぞれを統合的に関わらせながら、持続可能な社会づくりを目指しているからである。

表1 ESD基礎科目一覧

関係性	地球規模課題	地域課題
人間と自然	グローバル経済と環境保全	都市開発と自然との共生
自己と他者	多文化共生	自文化理解
個人と社会	人の移動とグローバルシティズンシップ	マイノリティの共生

次の表がESD基礎科目の一覧である。

以上のようなESDのプログラムを通して、学生たちがSDGsの一七目標に表されるような持続可能な開発について多角的に捉えながら、かつ一人ひとりの「私」が自らの問題であると感じ、一つひとつの日常の小さな行動を見直し、持続可能な社会づくりに向けてどのような行動をしていくことができるのかを考え、新たな行動につなげていくことが求められる。ESDプログラムは、私たちが直面している問題との向き合い方を再考させる。



図2 ESDを通して培う力

右の図は、ESDを通して、学生に培ってほしい力を「学習の四本柱」をもとにした四つのドメイン—ものの見方 (seeing)、

対応方法 (doing)、考え方 (thinking)、あり方 (being) — を使って表している。学生たちは、ESDの授業を通して、多角的視野をもって、問題を捉えていけるように、批判的思考をもって問題を問い直していけるように、刷新的なアプローチで問題を解いていけるように、また、こうしたプロセスを経て、個人が自らの価値観や行動、ライフスタイルといったあり様を問い返していけるように、さまざまな機会をつかってトレーニングしていく。そのためにも、参加型の手法や他者との協働の場がつけられ、グループワークやディスカッションなどの手法が多く使われている。実際、授業アンケートからも上図にある力のなかでも、とくに多角的視野や批判的思考が身についたと感じている学生が多かった。今後、授業評価アンケートとともに、授業中に学生から提出されるリアクションペーパーの記述から、どのような気づきがあったのかを注意深く読み取っていくことが必要であり、また教員間で共有されることが求められる。

発表後、Q&Aの時間が設けられ、拠点校からの参加者から、

どのように教員を動員したのか、to beを評価するにはどうしているのかという質問や、これらからどうしたらよいかを考えさせられたなどの声が共有された。また散会后に、国際交流プログラムとして、拠点校訪問を検討してほしいという声もあった。学生らの学びの機会が国際的にも広がっていくことがアジア拠点校シンポジウムに参加することが確認できた。また、当該プログラムを始めて二年経つため、学生および関係教員らへのヒヤリングなどを通して、プログラムの検証を行っていくことも今後の課題である。